

論説

近代の「特徴」と「特長」 —同音類義語の意味侵食—

伊 藤 真 梨 子

1. はじめに

幕末近代のいわゆる近代漢語研究は昨今も盛んに研究がなされている分野の一つであり、「病院」（佐藤亨 1979.9）、「回帰線」（荒川清秀 1997）などのように、いかにも近代らしい漢語については数多くの研究があるが、その一方で、幕末近代に急激にその生産性を高めた漢語語基に注目した研究は多いとはいえない状況にある。

筆者が前稿（伊藤真梨子 2019.3a）において調査した、「特別」などを構成する語基「特」もそのようなものの一つであり、「特」を前項とする二字漢語が幕末から明治時代にかけて大きく増加していたことを明らかにした。この「特」を構成要素とする二字漢語には、現在日常的に使われる語として残ったものが多く、「特別」「特殊」「特異」などの類義語の組み合わせが多く存在している。これまで、そのうちの、同音語である「特徴」と「特長」、そして、それらと類義語の関係にあると考えられる「特色」を対象として調査してきたが（注1）、その結果、明治・大正期の各語の意味について、3語とも明治30年代以降に辞書での意味記述に変化が見られることに気付いた。

そこで本稿ではこのうち、先行研究で指摘されている同音語の「特徴」と「特長」の意味侵食の問題について、特に時代を明治・大正期に焦点を

絞って検証を行い、類義語であり、かつ同音語でもある「特徴」と「特長」の関係の変遷を整理することを試みる。

2. 「特徴」「特長」の現代の辞書における記述

本節では、まず、「特徴」「特長」の現代の辞書での記述を確認し、その意味の差違を検討したい。使用した辞書は『日本国語大辞典 第2版』（※以下『日国2』とする。）、『大漢和辞典 修訂第2版』（※以下『大漢和2』とする。）、『類義語辞典』（1972）徳川宗賢・宮島達夫（編）、『同音語同訓語使い分け辞典』（1995）北原保雄・鳥飼浩二（編）、『使い方の分かる類語例解辞典 新装版』（2003）小学館辞典編集部（編）、『ちがいがわかる類語使い分け辞典』（2008）松井栄一（編）、『表現類語辞典 新装版』（2009）藤原与一・磯貝英夫・室山敏昭（編）、の7種類である。なお、次頁の表1での記述内容は、各辞書の内容を適宜まとめたものになる。

表1の記述を総合すると、「特徴」「特長」について以下のようにまとめることができる。

「特徴」の意味・用法

- a. 他と異なって特に目立つ点。
- b. 評価の視点とは関わりがなく、長所にも短所にも使える。
- c. 「特徴」はすでに存在する異なりについていうことが多く、意識的に特異な点を作り出すという場合はやや使いにくい。

「特長」の意味・用法

- a. 他と異なって特にすぐれている点。そのものの特にすぐれている点。
- b. 実用的な利点の認められる場合に用いる。
- c. 「特徴」を使用する場合に比べ、すぐれた点を露骨に訴えていると感じられる。

【表 1】現代の辞書での「特徴」「特長」の記述

	特徴	特長
『日本国語大辞典 第2版』	①他と異なって、特に目立つし。特色。 ②貴人からの、特別のお召し。	特にすぐれた所。
『大漢和辞典 修 訂第2版』	①特別のお召し。 ②他に比較して、取りわけて目立つし。特長。	他に比して特にまさつてゐること。 又、其の點。特別の長所。特徴。
『類義語辞典』 (再版)	感覚でとらえられ、しかも別段ねうちがすぐれているかどうかが問題にならないようなものは、「特徴」であって、「特色」というのはあまり適当ではない。目や耳でとらえられるような性質でも、それが価値にむすびつきうるばあいには、「特徴」でも「特色」でもよい。もっと抽象的な性質については、両者の区別ははっきりしない。	「特長」は長所であるような「特徴」。
『同音語同訓語使 い分け辞典』(初 版)	〔「徴」は目立つ点〕他と違って特に目立つ点。長所にも短所にも言う。広告などに見る「本書の十大特徴／特長」では、すぐれる点を訴えていることには変わりはないが、前者の方に慎重深さが出る。	〔「長」はすぐれた点〕他と違って特にすぐれた点。
『使い方の分かる 類語例解辞典 新装版』(新装版 第1刷)	他と区別するために目印となるような点をいう。	×
『ちがいがわかる 類語使い分け辞 典』(第1版第1 刷)	よくも悪くも他と異なって目立っている点。 他と異なる点の意の場合は「特徴」「特色」が使えるが、「特徴」はすでにあるものについていうことが多く、意識的に特異な点を作り出すという場合はやや使いにくい感じがある。 単に外見的な他との相違点を表す場合には「特徴」を用いる。	特に目立ってすぐれた点。
『表現類語辞典 新装版』(初版)	他と違って、特に目立つ点。また、しるし。 〈特徴〉は、他と違って、特に目立つ点を客観的に言うのに用い、人にも人以外のさまざまな物にも、また、外見的なことにも内面的なことにも広く使う。よい点も悪い点も含み、特に評価の視点と関わりなく用いられる。	そのものの特に優れているところ。 〈特徴〉の中で、特に実用的な利点の認められる場合に限って用いる。

このように、「特長」が「長所」に用いると限定されているのに対し、「特徴」は「長所にも短所にも」用いるところが大きな相違点である。したがって、この両語の使い分けについて問題になるとすれば、「長所」を表す場

合のことだと考えられる。しかし、次節で詳しくふれるが、先行研究で述べられているように、「特徴」と「特長」については、同音語であり、かつ類義語であるという状況にあるゆえに意味侵食も起きており、両語が現在のような関係で並立するようになってきた過程は、意外にも複雑なことが予想される。

また、「特徴」と「特長」の初出について『日国 2』、『大漢和 2』、『漢語大詞典』を見ると、(※『日国 2』と『大漢和 2』は作品名、『漢語大詞典』はこれに加えて、記載用例も引用する。)

『日国 2』

「特徴」

- ①他と異なって、特に目立つるし。特色。『生物学語彙』(1884), 『吾輩は猫である』(1905 - 06), 『本物の探偵小説』(1928)
- ②貴人からの、特別のお召し。『孜孜斎詩話』(上)(1800), 『後漢書 郎顛伝』

「特長」特にすぐれた所。『如是放語』(1898), 『学生と読書』(1938)

『大漢和 2』

「特徴」

- ①特別のお召し。『後漢書 朗顛傳』(※原文ママ), 『魏志 管寧傳』
- ②他に比較して、取りわけて目立つるし。特長。【用例なし】

「特長」

他に比して特にまさつてゐること。又、其の點。特別の長所。特徴。【用例なし】

『漢語大詞典』（※簡体字は適宜日本の字体に改めている。）

「特徴」

- ①特別徴召。別于平常の郷拳里選。《後漢書・郎顛傳》：“天之生固，必爲聖漢，宜蒙特徵，以示四方。”北齊顏之推《顏氏家訓・後娶》：“建光中，公車特徵，至拜侍中。”金元好問《王黃華墓碑》：“避漢末之乱，徙居遼東。曹公特徵，不應，隱居終身。”
- ②事物可供識別的特殊的徵象或標志。魯迅《且介亭雜文・臉譜臆測》：“這假面上，大約一定得表示出這角色的特徵，一面也是這角色的臉相的規定。”曹禺《雷雨》第一幕：“在陽光下他的臉呈着銀白色，一般人說這就是貴人的特徵。”
- ③特点。周恩来《目前軍閥混戰的形勢》：“先有農村紅軍，后有城市政權，這是中國革命的特徵，這是中國經濟基礎的產物。”秦牧《芸海拾貝・弁証規律在藝術創造上的運用》：“沒有形象就沒有文學藝術，形象是藝術的主要特徵之一。”

「特長」

- ①特別擅長。明胡應麟《詩藪・唐下》：“唐人特長近體，青蓮缺焉。”
- ②特有的長處。沈從文《會明》：“這人却似乎正因為這些品貌上的特長，把一生毀了。”侯寶林《我和相聲》：“相聲離不開諷刺，諷刺是相聲的特長。”

となっている。

『漢語大詞典』の「特徴」①の意味は、『日国2』の②、『大漢和2』の①の意味と通ずるものだと考えられるが、これらは全て『後漢書 郎顛伝』の同一部分を用例として挙げている。

そして、日本で現在使われる「特徴」の意味は、『日国2』①、『大漢和2』②にあたり、『漢語大詞典』②・③はそれと近いものと思われるが、挙げられている用例は『日国2』では1884年のもの、『大漢和2』には用例

はなく、『漢語大詞典』も魯迅や周恩来など近代以降の用例のみとなっている。

一方「特長」は、『大漢和2』には用例がないが、『日国2』では1898年の例がある。そして、『漢語大詞典』には二つの意味が記述されており、そのうちの②の意味は『日国2』の「特にすぐれた所。」と近いものだと考えられるが、これについての用例は沈从文《会明》と侯宝林《我和相声》であって近代以降のものである。また、『漢語大詞典』の①「特別擅長。」には明代の胡應麟《詩藪・唐下》の例が挙げられているが、この「特別擅長。」は『大漢和2』の「特長」の「他に比して特にまさつてゐること。」という記述とやや近い意味を表しているように思われる。このような「特長」についての記述をどのように扱ってゆけばよいか、今簡単に決めることはできないが、「特長」については明代以降の語という可能性があるということの確認できた。

3節では以上のような関係にある「特徴」「特長」について、これまでにどのような研究がなされてきたのかを概観したい。

3. 「特徴」「特長」の先行研究

まず、「特徴」のみについては、佐藤亨（2013）において、幕末・明治初期（1800ころ～1890ころ）に用例のある漢語で、「国立国語研究所『現代雑誌二〇〇万字言語調査語彙表』（公開版）、『現代雑誌の語彙調査—一九九四年発行七〇誌—』（平17）」での使用度数が199～100までの語の一つとして挙げられている。そして、「特長」についても、佐藤亨（2013）において明治中期以降大正中期（1890前後～1920ころ）に用例のある語の一覧に挙げられている。

また、陳力衛（2019（初出は陳力衛（2004）以下同じ。））においては、「『特』による二字熟語を中国語（『漢語大詞典』）と日本語（『日本国語大

辞典』からそれぞれ拾い出すと、中国語 119 語に対して、日本語は 87 (※原文ママ) である。しかし、近代以降の創出という視点からみると、中国語はわずかに以下の 28 語である。」と述べられており、その 28 語のうちの多くは日本語と同じ形態であり、逆輸入された可能性も高いとされている。陳 (2019) では「特徴」は日中ともに近代以降創出の語に含まれ、「特長」は日本の近代以降創出語に含まれている。陳 (2019) では「特徴」「特長」についてはこれ以上の記述は見られないが、「特」による造語について日中の関係を以下のように説明している。

つまり、「特」による造語は近代以前では中国でも発達していたが、近代以降の新造語なら、日本が特別に目立ってくる (むろん、語誌的研究では「特権・特殊」のように形態的に中国でさきに造られた語もある)。その日本的発達は、さらに「特別」から「特」のみへの短縮まで進む。たとえば、

特派—特別派遣 (中略)

のように、まず「特別」が他の成分と複合した言い方があり、それから「特」ともう一字の成分を抽出して上記のようにあたらしい造語を構成していく。

そうした短縮造語は中国語として受け入れられているものも多い。しかし、同様の方法による造語は多く日本独自のものを表している。

このように「特」を含む二字漢語については、他の多くの漢語の問題と同様に、中国での使用との関係を視野に入れておかなければならないが、これに関しては 6 節において改めてふれることとしたい。

さらに、「特徴」と「特長」について、服部静夫が「言語生活」81 (1958.6)

の「言語時評」内で「特長という書き方」というタイトルで述べたものがある。この要点をまとめると、以下のようになる。

- [ア] 「戦争まえには特長というかきかたは多分なかったように思う。ところがちかごろはどんどんふえていくようである。」
- [イ] 1958年当時、雑誌の広告欄にはよく「特長」という表記が見られるが、その意味は「特別の長所ともとれるし、特徴と長所ともとれるし、ただの長所ともとれる。」また、ある中学の国語教科書で「特長」の使用例を1例見つけたが、その文章は「特徴」でも意味の通ずるものであったため、何か理由があって「徴」を「長」に変えたのかと思ひ編集者に尋ねてみたが、返事はあいまいなものであった。ただし、「特長」は新聞の紙面にはまだ使われていないようで、「これは整理部か校正のかかりのほうの人たちの頭に、まだ特徴ということばが職業上の経験や習慣からのこっているからであろう。」
- [ウ] 「特徴」と「特長」には何らかの意味の違いが存在するのではないかと考えられもする。やはり、「特徴」と「特長」が同じ意味で通用するのは困ることが多いだろう。
- [エ] 「特徴」と「特長」の問題は言語の変化の一例なのかもしれない。

以上から、1958年当時の「特徴」と「特長」について推測できるのは、次の3点である。

- [1] 「特長」という表記は、第二次大戦前にはない比較的新しいものであると考えられていた。
- [2] 「特徴」から「特長」へと表記が変わっていく過程であるという捉え方があった。
- [3] 「特徴」と「特長」が違う意味を表す語なのか否かということが、はっきりとは確立されていなかった。

2節で見たように、『日国2』では「特徴」は1800年頃、「特長」は1898年の用例が初出として挙げられている。そのため、「特長」という表記が第二次大戦前にはなかったとはいえないが、1958年当時に【1】のような考えがあったということは、「特徴」と「特長」の使用状況について、何らかの特殊な事情が存在した可能性も考えられる。また、「特徴」と「特長」は現在では、意味の異なる語として並立しているが、1958年当時はその区別はいまいなもので、この二つが相互に意味の侵食を起こしていた時期があっただろうことも示唆されている。

そして、「特徴」に関するもう一つの先行研究が桑原文代（1986.12）「類義語—特色・特徴—」である。桑原は「特色」「特徴」「特長」「特質」「特性」の5語について、1986年6・7月の『朝日新聞』『日本経済新聞』、1985年10月から86年7月の『NHK 婦人百科』、中学校教科書5冊、図鑑2冊、その他複数の書籍から用例を集め、それぞれ、「特色」58例、「特徴」123例、「特長」4例、「特質」9例、「特性」21例、「その他（特徴的ななど）」12例が数えられている。ただし、桑原（1986.12）は、このうち用例数の多い「特色」「特徴」の2語についての分析を中心としており、「特長」については考察されていない。桑原（1986.12）で挙げられている「特色」と「特徴」の相違点は次の3点である。

- ① 理学的分野では「特色」は用いられない。これは、『表現類語辞典』の「特徴」の項に「客観的に言う」とあるのに関連があるかもしれない。
- ② 「特色」は長所につながる他との相違点を述べる場合に多用されるらしい。この場合に、「特徴」を用いてもよい。
- ③ 欠点につながることや好ましくないものの持つ目立つ点を述べる時は、「特色」はほとんど用いられない。

また、桑原は「特色」「特徴」の前接成分の分析も行い、

(前略)「特色」「特徴」の語義からも、書き手の判断を示すような形容詞的な語はとらない表現の方が圧倒的に多い。

「特色」「特徴」の用いられている文は、具体的に、何が(主体)、どんな(内容)の「特色」「特徴」を持っているか、を述べていることが多い。

として、「特色」「特徴」の文の中での位置として以下の三つのパターンを挙げ、

1. (主体) の 「特色・特徴」
2. (内容) (の) が 「特色・特徴」
3. (内容) (という) 「特色・特徴」をもつ(下表※本稿では引用していない。) など。

これについて、次のように日本語教育への活用も含めた提言を行っている。

文の中の位置で「特色」「特徴」に大きな差は見られないが、「特徴」の方が上記のような説明的な文に用いられる比率がやや高くなっている。

上の三つの文型に納まる率が「特色」69%、「特徴」79%と高いので、これらの語を外国人学生が学ぶ時には、語義だけではなく、文型も合わせて提示するとよいと思う。

さらに、桑原は「特色」「特徴」の派生語についても考察し、「特色ある」「特徴ある」については「特色ある」の方が多く、それは「『特色』とは長所を述べるという意味がある」ためだろうとしていて、「特徴的な」「特徴

づける」は用例がある一方「特色的な」「特色づける」は用例が見られず、「『特徴的な』『特徴づける』の方が自然に感じられる」と述べている。

以上のように「特徴」「特長」については、第二次大戦後の一部の時期の用例についてのみ詳細な考察がなされているが、2語の関係の通時的な変遷をたどるには、なお多くの情報が不足している状況にあるといえる。

4. 明治期の「特徴」「特長」の辞書記述

はじめに述べたように、筆者はこれまでに、「特色」「特徴」「特長」の明治期の国語辞書等での意味記述の変化を調査したが（注1参照）、そのうちの「特徴」「特長」に限ってまとめたものが、表2である。なお、『和英語林集成』〔初版〕（1867）、『和英語林集成』〔再版〕（1872）、『和英語林集成』〔第3版〕（1886）、『漢英対照 いろは辞典』（1888）、『日本辞書言海』（1889）、『日本大辞書』（1892）、『日本大辞林』（1894）、『明治のこことば辞典』、『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』には、「特徴」「特長」は立項されていない。

【表2】明治期の辞書での「特徴」「特長」の記述

	特徴	特長
『ことばの泉』（1898）	立項×	立項×
『国語漢文 新辞典』（1905）	立項×	立項×
『国漢文辞典』（1906）	特別のきざし、他に類なきしるし。	他に類なき長所。
『辞林』（1907）	他のものに比しとりわけて目立ちたるしるし。	ことにすぐれたること。特に長じたること。
『発音数引 実用新辞典』（1908）	他に目立てる特別のしるし。	特別にたけたること。特にすぐれたること。
『大增訂 ことばの泉 補遺』（1908）	とりわけて目立ちたるしるし。	ことにすぐれたること。独特の長所。
『辞林 四十四年版』（1911）	他のものに比しとりわけて目立ちたるしるし。	ことにすぐれたること。特に長じたること。
『大辞典』（1912）	特ニ徴スコト。○又、特殊ノ徴。	特殊ノ長所。

まず、「特長」について見ると、「すぐれている」という意味を持つことは各辞書で共通している。ただ、『辞林』（1907）から『辞林 四十四版』（1911）の間は、「すぐれていること」という「事態」の意味も記述されている。

これに対して「特徴」では「他のものと比べて目立つしるし」という意味は共通しているが、『国漢文辞典』（1906）には「特別のきざし」、『大辞典』（1912）には「特ニ徴スコト」という記述も加わっている。このうち「特ニ徴スコト」については、「徴ス」の意味内容にもよるが、『日国2』の「②貴人からの、特別のお召し。」と近いものだと思われる。この「特別のお召し」の意味の「特徴」の用例は、筆者による『日本語歴史コーパス明治・大正編I 雑誌』での調査からは得られず、この意味の「特徴」の日本での使用は、時期や分野が限られていた可能性がある。

また、「特徴」の「特別のきざし」の意味については、「特徴」の同音語として「特長」以外に『大辞典』（1912）に立項されている「とく—てう（特兆）」がある。この語の意味は「特殊ノ兆。」とされており、「特別のきざし」の「特徴」と重なるものであると考えられる。この「特兆」はJapanKnowledgeを利用した『日国2』の全文検索ではヒットするものはなかったが、コーパスでは1888年と1901年に各1例が存在する。（※以下の用例は全て『日本語歴史コーパス』によるものであり、用例中の下線は本稿筆者による。）

◎『国民之友』16「近南洋紀行（三）」（1888）志賀重昂（サンプルID：60M 国民 1888_16007 開始位置：1820 連番：1250）

「線上に列布し海霧乍ち模糊として風雨鍼も亦太だ下降し天候陰悪の特兆を現出したれども船の荒天区域に在らざりしにや幸にして何等の」

◎『太陽』<1901-12>「埃及の家畜」（1901）*（訳）／ドクトル・ヤンソン（作）（サンプルID：60M 太陽 1901_12039 開始位置：31970 連番：21060）

「現時のバルバー馬は尚ほ依然として昔時の特兆を保續せり但し
バルバー馬の標準體格として最も觀るべきものは」

このうち『国民之友』の例は「特殊ノ兆」の意味であるが、『太陽』の例はおそらくは「特徴」で表されるべきものだと思う。したがって、この「特兆」も本来ならば「特徴」「特長」とともに考察対象とすべきであるのだが、現時点では用例も少なく現代では見られない語であるため、これについては今回の考察対象からは除くこととする。

さて、以上表2でまとめたように、明治期の辞書の記述を見るだけでは、少なくとも「特長」が「特徴」の意味を表すような状況が起きることは考えにくい。しかし、用例数の少ない「特兆」ですら意味侵食が起きているようであるので、より一般的であった「特長」でも同様の現象が起きている可能性は十分にあると思われる。服部静夫(1958.6)に述べられているような混乱が、1958年頃の一時期に限って起きたものなのかどうか、次節では「特徴」「特長」の明治・大正期の用例を、『日本語歴史コーパス明治・大正編I雑誌』から採集し、意味侵食の状況について確認したい。

5. 明治・大正期の「特徴」「特長」の意味侵食

『日本語歴史コーパス明治・大正編I雑誌』(『日本語歴史コーパス』(バージョン2018.3, 中納言バージョン2.4.2)で語彙素「特徴」「特長」の用例を検索したところ(コア・非コアの両方を対象とする。), 「特徴」131例, 「特長」98例が得られた。(※本文種別が「引用」であるものを除外している。また、前後の文脈と合わせて読んだ上で不適切な用例ははずすなどの調整を行った。) 用例数の変遷は表3のようになる。

【表 3】 明治・大正期の「特徴」「特長」の用例数の変遷

年	特徴	特長
1874	0	0
1875	0	0
1887	0	0
1888	0	0
1895	2	1
1901	11	5
1909	22	48
1917	39	19
1925	57	25
計	131	98

* 明治時代 1868 年－ 1912 年 大正時代 1912 年－ 1926 年

両語とも 1895 年には出現し、以降 1901・1909・1917・1925 の各計測年に用例が見られる。そして、「特徴」は年を追って増加する傾向を示し、「特長」は 1909 年が最も用例数が多いという結果であった。

これらの用例のうち、意味侵食が疑われる例を数えてみると、以下の通りである。なお、「特徴」については、プラス面・マイナス面の両方を表すことができるため、厳密に言えば「特長」の意味を侵食しているということにはならないとは思いますが、本稿では「特徴」よりも、「特長」との親和性がより高い意味を表していると考えられる例を意味侵食と捉え、考察することとする。

語彙素「特徴」：「特長」の意味だと考えられるもの

(1909:1, 1917:2, 1925:5 = 8 例)

どちらの意味か判断に迷うもの

(1901:1, 1909:3, 1917:3, 1925:6 = 13 例)

語彙素「特長」：「特徴」の意味だと考えられるもの

(1909:3, 1925:4 = 7 例)

どちらの意味か判断に迷うもの

(1909 の 2 例)

このように、大多数の用例は表記と一致した意味を表しているが、相互に意味侵食を起こしていると考えられる用例も存在している。また、1901年までの用例総数が少ないということもあるが、侵食が疑われる例のほとんどが1909年以降に出現しているということも注目される。つまり、語の使用が始まった初期の頃よりも、使用の増加した後の時期の方が、相互の意味を侵食しているということになる。これまでの調査では(注1参照)、「特色」「特徴」「特長」の明治期の辞書記述が1906(M39)年～1907年の時期に変化していること及び、コーパスで採集した用例数も、1909(M42)年は「特色」と「特長」の使用数が他の年に比べて目立って多くなっているという事象が見られた。それに加えて、「特徴」「特長」間の意味侵食も起き始めているとなると、やはりこの時期が「特徴」「特長」そして「特色」の関係を考える上で非常に重要であると思わざるを得ない。この3語の変化についての通時的な分析は大変興味深いテーマではあるが、それについては紙幅の関係上稿を改めて述べることで、以下では「特徴」「特長」の意味侵食について実際の用例をいくつか挙げて検討したい。以下、語を指す場合は「特徴」「特長」とし、意味を指す場合は【特徴】【特長】と表記することとする。

●表記は「特徴」だが【特長】の意味を表す例

『太陽』<1925-9>「眞摯の力と犠牲の精神」(1925)内藤彦一(サンプルID:60M 太陽 1925_09037 開始位置:7060 連番:4680)

「熱心であると確かめた上は、その人の得意とするところ、即ち特徴に目をつけるのである。その特徴によつて各々適所に配置するのであるが、」

この例については「得意とするところ」の言い換えとして「特徴」が用いられているため、【特長】の方の意味により近いものといえる。

●表記は「特徴」だが意味は【特徴】か【特長】か判断に迷う例

『太陽』<1901-2>「煖室法の種類」(1901) 石原笠軒 (サンプル ID : 60M 太陽 1901_02035 開始位置 : 26170 連番 : 18140)

「水蒸気を發散せしめて、室内空氣の乾燥を防ぐ様にしてある事等が特徴であります、」

この例については、「室内空氣の乾燥を防ぐ様にしてある事」をただ「他のものと比べて目立つるし」と捉えるのであれば【特徴】であるが、「すぐれている点」として捉えるのであれば【特長】の方がよりふさわしいと思われる。

●表記は「特長」だが【特徴】の意味を表す例

『太陽』<1925-3>「滿洲で會つた人々」(1925) 宮原龍太 (サンプル ID : 60M 太陽 1925_03045 開始位置 : 12160 連番 : 8370)

「支那研究などは一々カード式にして造詣深い。會つた印象は目も可成り太く、口に特長がある。少し早口な憾はあるが能辯である。」

この例は「口に特長がある」というように、ただ単に外見的な「他のものと比べて目立つるし」を述べているため、【特徴】の意味を表している典型的なものである。

●表記は「特長」だが意味は【特徴】か【特長】か判断に迷う例

『太陽』<1909-13>「海軍と氣球」(1909) 奈良原三次 (サンプル ID : 60M 太陽 1909_13046 開始位置 : 24920 連番 : 16810)

「三 奈良原式氣球の特長 私は高等學校時代から氣球に興味を有ち、今日は本職の傍ら」

この例は上記「特徴」の「煖室法の種類」と似通ったものであり「氣球」について「他のものと比べて目立つるし」を述べているのか、「すぐれている点」を述べているのか、判断に迷う例である。

さらに、同一の記事内で「特徴」と「特長」の両方が使用されている場

合の両語の使い分けについて、いくつかの記事を用いて考察してみる。(※以下の用例は開始位置の若いものから並べてある。)

◎『太陽』<1909-13>「海軍と氣球」(1909) 奈良原三次

(サンプル ID : 60M 太陽 1909_13046 開始位置 : 15270 連番 : 10220)

「氣球は、如何なる性能を備ねばならぬか、換言すれば如何な特長を海軍氣球——海上用氣球——は具備せねばならぬかといふ問題に」

(サンプル ID : 60M 太陽 1909_13046 開始位置 : 24920 連番 : 16810)

「三 奈良原式氣球の特長 私は高等學校時代から氣球に興味を有ち、今日は本職の傍ら」

(サンプル ID : 60M 太陽 1909_13046 開始位置 : 46610 連番 : 31920)

「且つ濃霧の際に於ける天候の特徴は、無風のことで、風が出ればすぐ晴れてしまう。而して霧層以上は多くは青天白日なることである。」

この3例について見ると、三つ目の「特徴」は「天候の他のものと比べて目立つるし」を述べているため、【特徴】の意味であり、二つ目の「特長」は上述したように判断に迷う例である。そして、一つ目の「特長」は「性能」の言い換えと思われる部分であるので、やはり明確に【特長】の意味を表しているとは断じがたい。

◎『太陽』<1917-1>「列強海軍とド級艦」(1917) 安井正太郎

(サンプル ID : 60M 太陽 1917_01017 開始位置 : 29940 連番 : 19930)

「◎ドレッドノオトの主たる特徴は口径齊一なる多数の巨砲を搭載せる點と、タアビン機關を使用し」

(サンプル ID : 60M 太陽 1917_01017 開始位置 : 31240 連番 : 20800)

「佛蘭西のダントン型をド級艦に數へるものもあるが、兩者共に此二特徴を具備して居ない。従つて之を指してド級艦なりと言ふこと

は出来ぬのである。]

(サンプル ID : 60M 太陽 1917_01017 開始位置 : 34230 連番 : 22560)

「薩摩、ダントン、ロオド・ネルソンは共にドレツドノオトの如き
獨創的の特徴を有する艦に非ずして要するに在來艦の逐次擴大發達
したもので」

(サンプル ID : 60M 太陽 1917_01017 開始位置 : 51440 連番 : 34030)

「防禦甲板三吋、主砲塔八乃至十吋である。而して其特長は艦の中
中央線上に八門の主砲を二聯装して四砲塔に收め之を縦列し」

以上の4例はいずれも戦艦の構造について述べているものであり、「他の
ものとは比べて目立つるし」「すぐれている点」のどちらとも解釈しうる。
表記は「特徴」「特長」に分かれてはいるが、意味の違いを伴っていると
言えるほどの差異はないように見える。

以下の二つの記事は、実際にはさらに「特色」も用いられているもので
あるが、本稿ではそれは除外して考察を行うこととする。

◎『太陽』<1925-11>「最近の小説に現れた女性—藝術化されたモダン・
ガールの考察—」(1925) 木村毅

(サンプル ID : 60M 太陽 1925_11015 開始位置 : 21540 連番 : 14590)

「私はこれ以上作の梗概を語る事は控へるであらう。 たゞ言つて
おきたいのは、モダン・ガールの特長はその輕快な、人に臆しな
い、それでゐて無邪氣を装ふ會話の中に最も明瞭に認められる。(中
略) 彼女は享樂の機會は決して遁すまいとする。」

(サンプル ID : 60M 太陽 1925_11015 開始位置 : 73020 連番 : 48750)

「モダン・ガールの意味は、先づ上來説明したやうなものである。
その特徴を要約すれば毒々した化粧、明快な理智、口をついて出る
キツトと」

この2例について見ると、「特徴」はその後に「毒々した化粧」という

表現があるため、「すぐれている点」と解釈するのは難しく「他のものと比べて目立つるし」という意味で用いられていると考えられる。一方、「特長」については、これを「すぐれている点」だと断言することは難しいが、後に続く表現が「軽快な、人に臆しない、それでゐる無邪氣を装ふ會話の中に最も明瞭に認められる。」とあり、「特徴」に比べるとプラス評価の文脈で使用されているように思われる。

◎『太陽』<1925-11>「近代女性の社會的考察」(1925) 新居格

(サンプル ID : 60M 太陽 1925_11054 開始位置 : 30770 連番 : 20360)

「三、近代女性の特徴と本質 社會婦人が理論的であるにたいし、モダン・ガールはより多く」

(サンプル ID : 60M 太陽 1925_11054 開始位置 : 41280 連番 : 27120)

「舟を流す如く雑作なく軽くやつてゐるに過ぎないのである。モダン・ガールのもう一つの特長は物事をハツキリと言葉にも行爲にも表現することで」

(サンプル ID : 60M 太陽 1925_11054 開始位置 : 52270 連番 : 34290)

「形式や外貌で速断は出来ないことは注意すべき重要點と思ふ。それにモダン・ガールが貞操觀念の稀薄を特徴的難點とする論者がないうでもないし、さうでなくも」

(サンプル ID : 60M 太陽 1925_11054 開始位置 : 60690 連番 : 39740)

「我々は彼女等が持ちうる創造的要素を無視する譯には行かない。前叙した諸特徴をもつモダン・ガールがその極めて自由な云爲から既成觀念の塵を」

この4例のうち、1例目と3例目の「特徴」は文脈から見て客観的に「他のものと比べて目立つるし」の意味で使われていると思われる。また4例目の「特徴」についても、3例目にある「貞操觀念の稀薄を特徴的難點」というようなものを含んだ【特徴】と考えれば、「他のものと比べて目立

つしるし」の意味で使用されていると解釈できる。2例目の「特長」については、どちらかというプラスの評価をしていると解釈されるので、その点で「特徴」と使い分けられているといえる。

6. まとめと今後の課題

本稿での考察結果及び今後の課題をまとめたい。

本稿は、同音語であり、かつ類義語である「特徴」「特長」について、先行研究で指摘されている意味侵食に関して、明治・大正期の用例を対象に調査を行った。その結果、明治期の辞書の意味記述においては意味侵食は見られず、コーパスで採集した用例もそのうちの大多数は表記と合った用いられ方をしていた。したがって、「特徴」「特長」の担う意味についての大きな流れを捉えると、明治・大正期にも若干数ではあるが起きていた意味侵食が、1958年頃には目立って増加していたものの、結局は「特徴」と「特長」の2語として別々に現代でも使用されている、という予想図を描くことができる。

しかし、明治・大正期においても、明らかに意味侵食を起こしている例が少数ではあるが存在しており、両語が併用されている記事においても、明確な使い分けがあるようには思えないものも見られる。そして、何よりもそのような侵食が疑われる例のほとんどが、1909(M42)年以降に出現しているということは注目される事実である。筆者はこれまでの調査で(注1参照)、「特徴」「特長」そして類義語の「特色」について、明治30年代後半から辞書での意味記述やコーパスでの用例数に変化が見られることに気づき、類義語として括ることのできる語のグループが、まとまって変化するという現象が進行している可能性を考察してきたが、本稿の結果もその可能性を示唆する例証の一つとなりうるだろう。この「特徴」「特長」「特色」の通時的な変遷については、今後稿を改めて述べていきたいと思

う。また、これと関連して、3節でふれたように服部（1958.6）では「戦争まえには特長というかきかたは多分なかったように思う。ところがちかごろはどんどんふえていくようである。」と述べられているが、このような認識が生じるということは、大正期以降昭和20年代までの間に、「特長」の使用数が減少して認知度が低下していったという可能性も考えられるため、第二次大戦終結までの、昭和期の「特徴」「特長」の用例数の変遷についても今後検証する必要がある。

そして、本稿では明治・大正期の「特徴」と「特長」に絞った考察を行ったが、「特」を含む二字漢語全体を見渡すと、3節で挙げた陳（2019）に示されているように、日中双方での「特」の使用の関わりという問題が存在する。前稿（伊藤2019.3a）で提示したように、『日本国語大辞典 第2版』にある「字音語素」としての「特」の意味は、「(1) 雄牛。たね牛。動物のおす。(2) つれがない。ひとりぼっち。(3) ことにすぐれている。他とは別である。とりわけ。とくべつ。」であるが、これらの意味での「特」の使用は、全て日本でも近世以前から見られる（※(1)の意味の「特」は『日国2』では訓読みする「特牛」のみ立項されている。）。したがって、近代になって「特」の意味自体が大きく変化したというわけではなく、「特」を含む二字漢語の増加は、近代以前の「特」の使用に支えられていると考えられる。

このような日本の状況に対し、W. ロプシャイトの『英華字典』（1866-1869）では、「Peculiarly」の訳に「笏特」と「特」, 「Special」「Specially」「Specific」「Specifically」の訳に「特」が見られる。この訳が日本での英語の翻訳にどのように影響を与えたのかということも、当然考察すべき課題である。そして、それと同時に2節で見たように、『日国2』, 『大漢和2』, 『漢語大詞典』に掲載されている用例からは、「特徴」の現在使われる意味は、日中ともに近代以降のものであり、「特長」という語は明代以降のものである可能性があると考えられたため、この明での

「特長」の例が日本に及ぼした影響についても検討していかなければならない。また一方、『哲学字彙』（1881）で「特質」、『生物学語彙』（1884）で「特徴」があげられている「characteristic」の訳について、ロブシャイトの『英華字典』では「特」は用いられておらず、このような訳語がいつ成立したのかという問題も存在する。やはり「特」を含む二字漢語の近代における増加には、日中双方での使用が互いに影響を与えたものと考えられるため、その流れの詳細な検証も今後稿を改めて行っていきたい。

[注 1]

- 伊藤真梨子, 「近代の「特徴」「特長」「特色」語彙の変遷について」, 第 212 回青葉ことばの会, 2019 年 3 月 7 日, 八王子学園都市センター第 2 セミナー室
- 伊藤真梨子, 「「特色」「特徴」「特長」の語史—近代に求められた語基『特』が表してきたもの—」, 2019 年語彙研究会大会 (第 17 回大会), 2019 年 9 月 14 日, 明治大学駿河台キャンパス
- 伊藤真梨子, 「「特質」と「特性」の語史—明治 30 年代以降の動揺—」, 日本近代語研究会 2019 年度秋季発表大会, 2019 年 10 月 25 日, 仙台国際センター会議棟
- 安部清哉・伊藤真梨子・蓮井理恵・渡辺陽子, 「近代語資料としての明治理科教科書・中川重麗『博物学階梯』——明治 10 年刊初版を中心に——」, 第 214 回青葉ことばの会, 2019 年 9 月 21 日, 学習院大学北 2 号館

[付記 1] 本稿は、学習院大学東洋文化研究所 2018 年度一般研究プロジェクト「日本近代漢語表現の形成とアジア漢語圏近代漢語との比較研究」(代表: 安部清哉) の研究成果の一部である。

[付記 2] 本稿は、安部清哉（学習院大学文学部教授）の次の科研費の研究成果も含む。日本学術振興会科学研究費 2017－2019 年度基盤研究 C（基金）、課題番号：17K02785、代表：安部、「古典日本語の連語構成・詞辞複合表現形式の通時的基礎研究」

[使用コーパス]

『現代日本語書き言葉均衡コーパス（通常版）BCCWJ-NT』

中納言 2.4 データバージョン 1.1（2018 年 9 月 5 日検索）

国立国語研究所（2018）『日本語歴史コーパス』バージョン 2018.3、中納言バージョン 2.4.2（「特徴」「特徴」2018 年 7 月 22 日検索）

[参考文献（著書）]

佐藤亨（1986）『幕末・明治初期語彙の研究』桜楓社

荒川清秀（1997）『近代日中学術用語の形成と伝播：地理学用語を中心に』白帝社

佐藤亨（2013）『現代に生きる日本語漢語の成立と展開—共有と創生—』明治書院

陳力衛（2019）『近代知の翻訳と伝播 漢語を媒介に』三省堂

[参考文献（論文）]

服部静夫（1958.6）「特長という書き方」『言語生活』81「言語時評」内、p.16。言語生活編集部

佐藤亨（1979.9）「訳語「病院」の成立——その背景と定着過程——」『國語學』118、pp.11－23。國語學會

桑原文代（1986.12）「類義語—特色・特徴—」『ことば』7、pp.72－83。現代日本語研究会

陳力衛（2004.6）「漢語造語力の盛衰」『国文学 解釈と教材の研究』

49-7, pp.82 – 87. 學燈社

伊藤真梨子 (2018.3) 「近代漢語「開化」「半開」「未開」小考」『学習院大学大学院日本語日本文学』14, pp.77 – 97. 学習院大学大学院人文科学研究科日本語日本文学専攻

伊藤真梨子 (2019.3a) 「語基「特」を含む漢語の幕末・近代における拡大」『人文』17, pp.115 – 152. 学習院大学人文科学研究所

伊藤真梨子 (2019.3b) 『『改正増補 博物学階梯教授本』(1880)の語彙』『国語国文学会誌』62, pp.38 – 25 (87 – 100). 学習院大学文学部国語国文学会

[参考文献 (辞典)]

W. Lobscheid (1866–1869) 『English and Chinese dictionary : with the Punti and Mandarin pronunciation, pt. 1-4』Hongkong : “Daily Press” Office,

J.C. Hepburn (著), 松村明・飛田良文 (解説) (1966) 『A Japanese and English dictionary; with an English and Japanese index』北辰 (『和英語林集成』〔初版〕)

J.C. ヘボン (1970) 『和英語林集成』〔再版〕復刻版 東洋文庫

徳川宗賢・宮島達夫 (編) (1972) 『類義語辞典』東京堂出版 (1972.4 初版) (1972.7 の再版を使用)

J.C. ヘボン (1974) 『和英語林集成』〔第3版〕復刻版 講談社

惣郷正明・飛田良文 (編) (1986) 『明治のことば辞典』東京堂出版

漢語大詞典編輯委員会・漢語大詞典編纂処 (編) (1986) 『漢語大詞典』上海辞書出版社 (第一版第一次印刷)

諸橋轍次 (著), 鎌田正・米山寅太郎 (修訂) (1990) 『大漢和辞典 修訂第2版』大修館書店

北原保雄・鳥飼浩二 (編) (1995) 『同音語同訓語使い分け辞典』東京堂出

版（初版を使用）

日本国語大辞典第二版編集委員会（編）（2000 - 2002）『日本国語大辞典
第2版』小学館

小学館辞典編集部（編）（2003）『使い方の分かる類語例解辞典 新装版』
小学館（新装版第1刷を使用）

佐藤亨（2007）『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』明治書院

松井栄一（編）（2008）『ちがいがわかる類語使い分け辞典』小学館（第1
版第1刷を使用）

藤原与一・磯貝英夫・室山敏昭（編）（2009）『表現類語辞典 新装版』東
京堂出版（初版を使用）

愛知大学中日大辞典編纂所（編）（2010）『中日大辞典 第3版』大修館
書店

日本語学会（編）（2018）『日本語学大辞典』東京堂出版

飛田良文・松井栄一・境田稔信（編）（1997）明治期国語辞書大系『漢英
対照 いろは辞典』大空社、なお、以下の辞書も同じ辞書大系による。『日
本辞書 言海』、『日本大辞書』、『日本大辞林』、『ことばの泉』、『大辞典』
下巻（た～は）、『辞林』、『辞林 四十四年版』、『国語漢文 新辞典』、『大
増訂 ことばの泉 補遺』、『国漢文辞典』（さ～を）、『発音数引 実用
新辞典』

[参考文献（デジタルアーカイブ）]

「国立国会図書館デジタルコレクション」

和田垣謙三 等（編）（1881）『哲学字彙：附・清国音符』東京大学三学部
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/752942>

井上哲次郎・有賀長雄（増補）（1884）『哲学字彙 改訂増補』東洋館
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/994560>

井上哲次郎 等（著）（1912）『哲学字彙：英独仏和』丸善

(192)

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/752943>